



# HABATAKI

はばたき 立 大 学  
UNIVERSITY OF SHIZUOKA

52-1 Yada, Suruga-ku Shizuoka-shi Shizuoka-ken 422-8526 Japan

inside NEWS



## ●CONTENTS●

剣祭 .....	1	セミナー「変革の時代の医療・福祉経営を考える」.....	14
国際O-CHA学術会議 .....	2	奨学金をありがとうございます .....	14
静岡県・浙江省友好提携25周年記念 .....	3	静岡健康・長寿学術フォーラム、研究助成採択 .....	15
環境科学交流記念シンポジウム .....	5	受賞 .....	16
サテライトシンポジウム .....	5	図書館だより .....	17
静岡環境フォーラム21 .....	6	学外研修旅行、教員の人事・名誉教授称号授与 .....	19
防災情報シンポジウム .....	6	キャリア支援センター紹介 .....	20
日本食品衛生学会学術講演会 .....	7	インターシップ反省会 .....	20
食品薬学シンポジウム .....	8	清水ロータリークラブ .....	21
「グローバルCOE」食薬融合研究国際的拠点形成 .....	9	テコンドー世界大会に出場して .....	21
リール政治学院・フィリピン大学から留学生来学 .....	13	はばたき寄金からのお知らせ .....	22
ロシアモスクワ国立国際関係大学から教員来学 .....	13	教員の著書紹介、寄稿募集 .....	23
中国・上海師範大学一行が本学を訪問 .....	13		

# 第21回 剣 祭

～県大生、はじける!!～

11月10日(土)、11日(日)の両日、第21回剣祭が開催されました。今年のオープニングセレモニーは、県大吹奏楽部・シンフォニックウインズの演奏の下、西垣学長の挨拶に続き、薬玉が割られてスタートしました。

学部棟では、「パラサイト」や「ジャングル、ぐるぐる」、アコースティッククラブ等によるライブ演奏などのイベントが行われ、漫画研究会、写真部などの文科系クラブの展示、発表や

薬学部、食品栄養科学部の研究室公開も行われました。また、模擬授業も行なわれ、スタンプラリーも子供たちに大人気でした。

カレッジホールでは、茶道部等のデモンストレーションが行なわれました。ユニバーシティプラザでは、多くの模擬店が出店し、正門前ではIFCによる多国籍料理店も出店されました。また、体育館では、恒例のフリーマーケットも行われました。

学生ホール、モニュメント下では、チアリーディングや軽音楽部のライブが、大講堂では、「Shin動」をテーマにしたジャズダンス部の舞台公演や箏曲部の優雅な調べが披露され、小講堂では、ザ・ビバレッジのアカペラライブで美しいハーモニーに酔い、笑研ライブでは大いに笑いました。

秋の2日間、県大生パワー全開といったところでした。



バドミントン部



箏曲部



学長挨拶



ジャズダンス



チアリーディング



笑研



華道部



漫画研究会



ビバレッジ



軽音楽部



こんべいとう



アコースティッククラブ

# 第3回国際O-CHA学術会議報告

The 3rd International Conference on O-CHA (tea) Culture and Science (ICOS)

第3回国際O-CHA学術会議・副組織委員長 食品栄養科学部 教授 横越英彦

世界お茶祭り2007「O-CHAは世界語」が11月1日から4日までコンベンションアーツセンターグランシップを中心に開催され、その一環として、11月2日から4日までの3日間は、静岡県立大学を主な会場として、第3回国際O-CHA学術会議が開かれました。今回の会議では、世界20ヶ国・地域から参加者数は、グランシップ200名、静岡県立大学608名、合計800名を超え、無事に終了することができました。シンポジウム演題数は32で、「世界の主要茶生産国における生産と消費レポート」、「世界の茶樹の成分」、「世界の病害虫防除法の新しい動向」、「緑茶を摂取することによる脳機能への影響」などが発表され、また、ポスター発表数は168題で、茶の歴史・文化、生産、流通・消費、効能など幅広い分野に渡る最新の研究発表がなされました。

特に、歴史・文化部会では、「ウーロン茶の起源」、「茶の起源へのハニ族の拘わり」、さらには、茶の重要成分であるカテキン発見の歴史や旨味のヨーロッパへの浸透など興味深い発表がありました。

生産部会では、「中国雲南省や韓国における野生茶樹の遺伝的評価」、「選抜技術に拘わる基礎的研究」、「より豊かでバラエティに富んだ香りの追求」、「茶生産における旱害に対する茶樹の反応」、「茶樹の収量品質に及ぼす各種肥料の影響や各種病害虫のマネジメント」や「韓国の伝統的な釜炒りによる手揉み製法やシーマ製法などによる新しい茶製造法」などが発表されました。

流通・消費部会では、「中国、韓国、日本における茶の品質評価」、「韓国、オーストラリア、インドネシア、日本、トルコ、ナイジェリアなどの国々における茶の流通などの現状」について、海外からの研究者による発表がありました。

効能部会では、「緑茶の脳機能への影響（認知症予防、アルツハイマー病の記憶能改善、抗老化、神経伝達物質）」、「テアニンとカテキン併用の新規効果」、「カテキンの医薬品への開発」など疾病予防へ向けての最新の研究結果が報告されました。

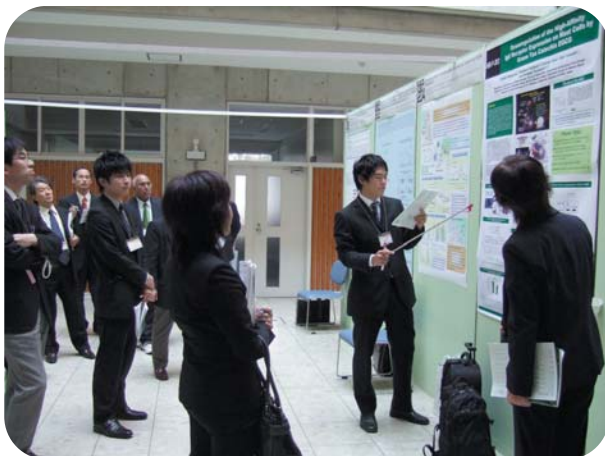
Researcher Awardとして中国、スリランカの2名の研究者に、また、優秀ポスター発表賞は20題選出され、その中に本大学からは2名が選ばれました。これらの研究発表を通じて、茶学術研究の発展と消費拡大に大きく貢献することができました。茶に関わるあらゆる分野の研究者が一堂に会し、最先端の研究成果が世界に向けて



シンポジウムの様子

発信されたことは非常に意義深いものがあります。日本のシンボル富士山を有し、日本における茶の生産・流通の中心地である静岡県において、茶に関わる数多くの研究発表がなされ、21世紀の茶学術研究並びに茶産業の発展に寄与することが出来たと思っております。

本学術会議の開催にあたりましては、大学の各施設を利用して頂きました。また、教職員や学生アルバイトの御協力を頂きました。この場を借りて、全ての皆様方に御礼と感謝を申し上げます。



ポスター展示

## 静岡県・浙江省友好提携25周年記念

# 静岡県・浙江省大学交流事業に参加

国際交流を通じて本県の高等教育機能の向上や各大学の教育・研究の発展を図るため、静岡県と大学ネットワーク静岡が連携して、静岡県・浙江省友好提携25周年を契機に平成19年10月24日～28日の間、浙江省の大学との交流事業を実施しました。本学からも西垣学長をはじめ、総勢19名の教職員が浙江省内の大学を訪問し、様々な交流を行いました。

## 中国・浙江大学と大学間交流協定を締結

本学は、従来から浙江大学統合前の旧杭州大学と相互に交流を進めてきたところですが、さらなる学術交流の発展を目指し、統合後の浙江大学と交流協定を締結しました。

今回、静岡県・浙江省友好提携25周年記念事業に合わせて西垣学長が訪中し、平成19年10月25日、浙江大学紫金港キャンパス内の国際会議センターにおいて協定書に調印しました。

なお、この協定書の調印式には、石川嘉延静岡県知事も同席されました。

本学は、旧杭州大学と1988年に交流協定を締結し、交流を進めてきました。その後、1998年には、浙江大学、杭州大学、浙江医科大学及び浙江農業大学が統合され、新たな浙江大学が誕生しましたが、従来から行われていた教員交流、語学研修は継続して実施してきました。

一方、2004年には、本学薬学部が浙江大学薬学院と学部レベルの交流協定を締結し、研究交流等を進めてきました。

今回の協定の内容は、学生及び教員の交流、学術情報の交換、共同研究などを通じた幅広い教育・学術文化交流を促進するというものです。

浙江大学は、中国では、北京大学、清華大学とともに最高ランクに位置する国立大学で、学生数は約41,000人、玉泉、西溪、紫金港など6キャンパスの総敷地面積は約533万㎡、大学図書館全体の蔵書数は、約639万冊で中国最大規模を誇っています。



## 浙江大学薬学院との交流推進に好スタートを切る

本学薬学部では、2004年に中国浙江大学薬学院と「学術交流に関する協定（学部間協定）」を締結し、研究者の交流、共同研究などに努めてきましたが、このたび静岡県・浙江省友好提携25周年を機会に更なる積極的な交流を図るため、西垣学長、奥薬学部長、今井薬学研究科長らが薬学院を訪れ、曾常務副院長らの教職員と意見交換を行いました。

西垣学長の挨拶に引き続き、奥学部長の薬学部概要説明、今井研究科長の大学院薬学研究科の概要と研究内容説明、および野口教授からのグローバルCOEの概要説明を受けて、具体的連携として、西垣学長から大学院生の受け入れ、双方の教員によるシンポジウムの開催等、可能などから実をあげていくことを提案しました。

これに対して浙江大学薬学院、曾常務副院長よりシンポジウムの開催への賛意と、早期体験学習として短期間ではあるが学生を本学に派遣したいとの申し出があるなど、両大学が意見の一致をみることができ、更なる交流の推進に向け好スタートを切ることができました。

意見交換の後には曾常務副院長らにご案内いただき浙江大学薬学院の充実した施設、設備を視察させていただきました。



浙江大学薬学院訪問団と関係者

## 更なる交流の発展に期待

食品栄養科学部を代表して、浙江工商大学食品生物・環境工程学院を訪問しました。部局の英語名はCollege of Food Science, Biotechnology and Environmental Engineeringです。励建荣学院長（学部長）や孟岳成主任（学科主任）をはじめ10名



充実した機器類

あまりの教員が交換会に参加し、行われている教育研究を紹介されました。私も食品栄養科学部の教育研究を紹介しました。その結果、講義科目や研究分野が本学の食品生命科学科と非常によく似ており、部局間の交流が容易であると思われました。その後、食品生物・環境工程学院のある建物を見学しましたが、最近の経済発展により設備が充実しており、浙江省の食品系学部の中ではトップレベルであるという評価は間違いなく感じました。



中山勉教授と励建荣学院長

なお、浙江工商大学の食品生物・環境工程学院以外の部局は杭州市郊外（東に車で50分）のキャンパスに移転しており、そちらも見学する機会に恵まれました。つくば学園都市のような規模と景観の大都市に複数の大学が市内から続々と移転しているようです。食品生物・環境工程学院も5年以内には新キャンパスに移転することでした。励院長は自分のところの学生を中国側の費用で一定期間日本に滞在させることや、来年、ご自身が静岡を訪問する意向を示されました。したがってさらなる交流の発展が期待できます。

（食品栄養科学部 教授 中山 勉）

## 学生・教員の相互交流、共同研究の実施が益々前進

国際関係学部では伊豆見元教授、星野昌裕准教授、諏訪一幸客員研究員が浙江大学外事処、浙江大学メディア・国際文化学院、浙江大学非伝統的安全保障・平和発展研究センターを、また中山慶子教授が浙江大学社会科学学院などを訪問しました。これら一連の交流を通じて、学生間の相互交流、教員の相互派遣、共同研究の実施などの面において、将来にわたって関係を拡大していくことで基本的な合意をみました。

学生交流については、これまでも国際関係学部では毎年約10名の学生を浙江大学に派遣して3週間の中国語研修を実施してきましたが、今後は1年間の長期語学留学や専門授業科目の相互履修を可能にするような学生交流の実現に向けて担当者間で話し合いを継続することとなりました。

教員の相互派遣および共同研究の実施については、東アジア研究、国際社会学、国際政治学、日中文化比較研究などを専門領域とする研究者間の交流を発展させていくこととなりました。このほか、杭州市には日本研究者を多数擁する浙江工商大学などもあり、浙江省所在の各大学との連携を強化していくこととなりました。

## 浙江大学社会科学学院を訪問して

浙江省大学交流事業の一貫として、10年来研究交流を続けてきた浙江大学産業経済研究所長汪斌先生との研究推進のため、浙江大学を訪問することとなりましたが、先生が急病で入院され、重篤なご病気ということでお会いできなくなりました。また、副所長の立場におられた先生もその少し前に交通事故で亡くなり、研究所自体が、上海研究中心にまとめられるとのことで、急遽、社会科学学院を訪問し、今後のグローバル・スタディーズ・センターとの研究提携を約束してきました。初めてお目にかかった同学院社会学科長の頼先生は無形文化財研究の第一人者で、研究交流に大変意欲的でありました。



中山慶子教授（校舎にて）

同学院社会学科は、旧杭州大学校舎の正門近くの古い建物にあり、杭州大学は数回訪れていたためとても懐かしく感じました。

杭州市全体が、十年前に比べると、見違えるように高層化し、西湖から、霧に煙る古い街並みを望む美しさは、もう望めません。湖畔も新しい西洋ブランド街が出現。銀座、ソウル、ニューヨーク、ローマ、ベルリン、パリ、どこも同じの街並みが出来ています。しかし、一本裏通りのお惣菜やでは、1皿2、3元の魚のスープや、モツの煮込みに人が群がっていました。急激な近代化が、ここにも格差社会を出現させてきています。しかし、若者はみんな、とても元気で、変わり行く中国に多くの夢を抱いているように見えました。頼先生の研究室で助手的な仕事をしている院生に聞いてみると、「その通りだ。」という答えが返って来ました。比較社会研究をしようかと約束して杭州を後にしました。

（国際関係学部 教授 中山慶子）

## 「環境科学交流記念シンポジウム」を開催

環境科学研究所では、10月24日(水)～28日(日)の間に行われた静岡県・浙江省友好提携25周年記念静岡県・浙江省大学交流事業の一環として、浙江省の杭州市にある浙江大学環境資源学院と「環境科学交流記念シンポジウム」を開催しました。

本シンポジウムは、当研究所の大気環境研究室が浙江大学環境資源学院と共同で行っていることから実施の運びとなったものです。

10月25日(木)に杭州市内のホテルにおいて、当研究所からは岩堀所長をはじめとして5名が、また、環境資源学院からは朱教授ら5名と学生約20名が参加して、冒頭に西垣学長と丸山県民部部長代理のご挨拶をいただき、それぞれ日本と中国における環境問題の現状と対策について発表しました。

シンポジウム終了後は、今後、このような交流事業を、お互いの大学を訪問し、継続して開催していくことを確認しました。

また、今回の交流事業においては、本学と浙江大学との間で、念願の学術交流の協定が締結されたことから、当研究所としても、今後、なお一層の活発で有意義な交流の促進が期待されます。



シンポジウム



シンポジウム後の記念撮影

## ICOS2007サテライトシンポジウムと科学英語セミナー開催される!!

ICOS2007効能部会長 薬学部長 教授 奥 直人

11月初旬に世界お茶まつりの一環として開催されました第3回国際O-CHA学術会議(ICOS2007)に際しまして、会議前日の11月1日に本学小講堂にて学術会議効能部会の海外特別講演者4名によるサテライトシンポジウムを行いました。このサテライトシンポジウムは本学グローバルCOE主催で行われたもので大学院生の科学英語セミナーを兼ね、第一部では大学院生向けにロンドン大学P. W. テイラー博士、アナマライ大学(インド)ナギニ博士、プレトリア大学(南アフリカ)アポストリデス博士、ロンドン大学D. タスデミール博士にご講演を頂きました。また、第二部では、本学の丸山君、廣岡君(以上薬学研究科)、田副君、植草君(以上生活健康科学研究科)がそれぞれの研究内容を発表し、英語によるプレゼンテーションについて特別講演者や本学ホーク先生から有意義なコメントを頂きました。小講堂は大学院生を中心にほぼ満席となり、大学院生のグローバル化教育にとっても役立ったと考えています。また、海外から来られた先生方にもとても好評で、後日アポストリデス博士から頂いたメールには「英語を母国語としない南アフリカの大学院生にも同様な企画を試してみたい」と書かれていました。今後もこのような企画を通して、本学のグローバル教育を推進していきたいと考えています。



## ～地域に根ざして情報発信！～ 静岡環境フォーラム21を開催

環境科学研究所・地域環境啓発センターの企画で、県民一般を対象とした静岡環境フォーラム21が、10月14日(日)、ツインメッセ静岡にて開催されました。本フォーラムは、環境科学研究所に加え、静岡県環境衛生科学研究所、静岡県工業技術研究所の県内3機関が主催する事業です。昨年度まで、環境研究交流しずおか集会として10回にわたり開催してきましたが、今年度から「静岡環境フォーラム21」として装いを新たにいたしました。

今年度は、テーマを「環境・文明・感染症の接点—しのびよる感染症の脅威」とし、4人の先生方による下記の講演が行われました。

- ①大橋典男教授（本学環境科学研究所）：環境変化と病原微生物遭遇のリスク
- ②杉枝正明主幹（静岡県環境衛生科学研究所）：ノロウイルス流行について
- ③川端寛樹室長（国立感染症研究所）：潜在するマダニ媒介性感染症について
- ④鈴木隆教授（本学薬学部）：自然界における新型インフルエンザウイルスの出現

最後に、坂田昌弘教授（環境科学研究所）を座長として、参加者からの質問を中心とした総合討論が行われました。

参加者数は約100名で、本集会テーマに対する関心の高さをあらためて知ることが出来ました。また、アンケート結果から、充実した内容であり満足できたとの意見も寄せられただけでなく、新聞紙面においても取り上げていただき、紹介されました。なお、本事業は、静岡新聞社・静岡放送のご後援をいただき開催いたしました。



総合討論から（写真左より坂田センター長、鈴木先生、川端先生、杉枝先生、大橋先生）

## 防災情報シンポジウム ～災害時の効果的なIT活用に向けて～

経営情報学研究科附属地域経営研究センター主催の「防災情報シンポジウム～災害時の効果的なIT活用に向けて～」が10月27日に同研究センターを会場に開催されました。県内外より自治体の防災担当者、IT関連企業の方、本学の教員・学生などの計53名が参加しました。

当日は、西田在賢センター長（経営情報学部教授）の挨拶から始まり、次に湯瀬裕昭同副センター長（経営情報学部准教授）より「東海地震ドットネット」を5年間運用した実績から報告と課題が述べられたのに続いて、小澤謙一氏（静岡県防災局防災通信管理室）からは「静岡県総合防災情報システム(ASSIST-II)」の概要と課題が述べられ、民間が運用するシステム例として、花澤真平氏（株式会社エスピーエス情報システム）より携帯電話のメール機能とインターネットを利用した「安否情報確認システム」が紹介されました。干川剛史教授（大妻女子大学人間関係学部）からは、平成19年に起きた新潟県中越沖地震での活動報告として、「WIDIS」と呼ばれるWeb GISシステムと災害ボランティアセンターとの連携における改善点を、そして柴田義孝教授（岩手県立大学ソフトウェア情報学部）は大規模災害時において情報システムネットワークの耐故障性をいかに高めるか、という観点から、気球を利用した無線LANの研究などが紹介されました。その後、小澤氏に代わって岩田孝仁氏（静岡県防災局防災情報室）をパネラーとして加え、「東海地震に備えたIT活用」というテーマでパネルディスカッションが行われました。会場から多くの質問や意見が寄せられ、パネラーと参加者の活発なディスカッションが行われました。今回のシンポジウムは、災害時においては、正確な情報の収集と発信が重要であり、またその実現のために行っている研究や活動の現状を自治体や民間企業・一般市民に知っていただく良い機会となりました。また、このシンポジウムの模様は地元テレビのニュースや新聞にも報道されました。

（地域経営研究センター）



活発なディスカッションが行われた

## 第94回日本食品衛生学会学術講演会が開催される

実行委員長 食品栄養科学部 教授（副学長）木苗直秀

第94回日本食品衛生学会学術講演会が、10月26日(金)と27日(土)の両日、本学キャンパスで開催されました。あいにくの雨天でしたが、全国の大学、国公立の試験研究機関、企業の品質管理・分析機関などから600余名が参加されました。初日には2題の特別講演が行われ、長尾拓先生（内閣府食品安全委員会委員）は「食品安全委員会の活動」と題して、現在社会問題となっている「食の安全、安心」に取り組む行政担当者、食品関連事業者、消費者の責務について話されました。また、若林敬二先生（国立がんセンター研究所所長）は「食品とがん研究の最前線」と題して、我が国で死亡原因の第1位を占めるがん研究の最新情報を提供され、今後のがん対策について詳細に言及されました。いずれの講演にもフロアからの質問があり、関心の大きさが伺えました。第2日目の教育講演では山田静雄先生（本学薬学部教授）が「食品の効果と医薬品との相互作用」と題して、食品の新たな機能性ととも、薬物との相互作用に関する研究成果を報告されました。メタボリックシンドロームや生活習慣病が話題となっている中で健康食品の摂取の問題点等も指摘され、興味深い内容でした。2日間を通して一般口頭発表59題、ポスター発表37題のほか、6つの技術セミナー、7つのランチョンセミナーが開催されました。ポスター発表と30社の機器、書籍の展示会は体育館で行われたので十分なスペースが取れ、多くの参加者が熱い討論を展開しました。



ポスター発表

なお、初日に学生ホールで開催した懇親会にはおよそ300名が参加し、桜エビの搔揚げ、黒はんぺん、おでんなどの郷土料理や地酒を口にして大いに盛り上がりました。また、本学のマンドリンクラブやシンフォニック・ウインズには美しい音色や懐かしい曲を奏でて頂きました。



交流を深めた懇親会

「本大会に先立って10月25日(木)には「あざれあ大ホール」にて米谷民雄先生（国立医薬品食品衛生研究所食品部長）が「食品の安全、安心への期待を考える」と題して基調講演をされました。引き続いて農業生産者、食品製造者、消費者、行政担当者がそれぞれの立場から発言されたのち、予定時間をオーバーしてフロアとの意見交換を行いました。」

3日間にわたり御協力を頂いた増田修一助教をはじめ教職員、学生とともに、学部棟、体育館を快く使用させて頂いた本学関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。



## 第2回食品薬学シンポジウム開催

実行委員長 薬学部 教授 野口 博司

去る10月18日(木)、19日(金)に「第2回食品薬学シンポジウム」が本学小講堂で開催されました。このシンポジウムは本学21世紀COEプログラムのアドバイザーの一人であった、阪大名誉教授 北川勲先生が、「食品の問題を薬学が捉え直さなければ」と提唱なさって平成11年より7年間にわたり8回開催された「くすりと食物シンポジウム」を日本薬学会において生薬・天然物部会の発足を機に、部会主催のシンポジウムとして発展させたものであります。

21世紀COEプログラムは昨年度で終了しましたが、本年引き続き食品栄養科学部と薬学部の提案がグローバルCOEに採択されましたこともあり、本シンポジウムは、上に述べました趣旨からも本学の健康と食に係わる科学的研究成果を披露し、今後の展開に不可欠なテーマを議論する場ともなりました。特に富山大学和漢薬研究所の「東洋の智に立脚した個の医療の創世」プログラムとは昨年引き続きミニジョイントセッションが設けられ、食品と医薬品の相互作用や、食品の効能について熱心な討議が行なわれました。



熱心な討議が行われた

一般演題も北海道から九州まで13大学1国立研究所から口頭発表30、ポスター14演題が集まり、殊に静岡薬学部から天然物化学の演題が提供され普段薬学とは交流の少ないこともあって熱心な討議が繰り広げられました。本学の院生や企業を含め凡そ180人の参加者があり、小講堂のなかで熱気に満ちたほどでした。

また、懇親会も学生ホールで行われ学生の参加者も多く、拠点リーダーの木苗先生が乾杯の音頭を取ってプログラムの発展を誓われ、部会長の京大名誉教授本多先生が次回は近畿大学で開催されることをご紹介になりました。



ポスター展示

# 『グローバルCOEプログラム』食薬融合研究国際的拠点形成 米国大学院連携のための渡米報告

大学院生活健康科学研究科／研究科長 小林裕和  
教授 合田敏尚  
教授 大橋典男  
大学院薬学研究科／研究科長 奥 直人

日本政府は1995年に、資源が限られた我が国が生き残るために、「科学技術創造立国」の実現を掲げ、このための優秀な研究者の育成を大学院研究科に課した。この具現化として、文部科学省は、2002年度より「21世紀COEプログラム」、さらに2007年度より5年間、「グローバルCOEプログラム」を開始した。

本学大学院生活健康科学研究科および薬学研究科は、「食薬融合」研究に対して、「21世紀COEプログラム（分野：学際・複合・新領域）」に採択され（合計交付金：7.71億円）、引き続き、2007年に「グローバルCOEプログラム」に採択された（2007年度交付金：2.63億円）。本分野における継続採択は、当初から数えて16倍の難関であった。その結果、食品栄養科学領域および薬学領域において、国内で唯一のCOE拠点となり、すなわち、文部科学省が唱える「世界最高水準の研究基盤の下で世界をリードする創造的な人材育成を図るため、国際的に卓越した教育研究拠点」としてその職務を託されたことになる。

「グローバル」な教育・研究体制を強化するために、2007年9月9日から9月21日まで、オハイオ州立大学、カリフォルニア大学（Berkeley校、San Francisco校、Davis校）、さらにニュージャージー医科歯科大学を訪問し、これらの大学院との連携体制を整備した。この間、9月11日を挟んだため、米国内の空港でのチェックは厳戒態勢であった。

## オハイオ州立大学（The Ohio State University）

1870年に創立されたオハイオ州立大学（The Ohio State University）は、オハイオ州コロンバス市に位置し、17 Collegesと6 Schoolsから構成される。学生と教員の総計は7万名に及び、1キャンパスとしては米国最大規模である。

2007年1月に締結された本学とオハイオ州立大学との大学間交流協定に則り、本学国際関係学部の吉村紀子教授とオハイオ州立大学の中山峰治准教授（本学客員教授）のご尽力により、本学大学院生活健康科学研究科および薬学研究科の博士後期課程学生の履修科目



オハイオ州立大学スタジアム（裏手）  
1922年に建築され、その後の拡張で10万人収容可能。米国で最大級のアメリカンフットボール・スタジアム



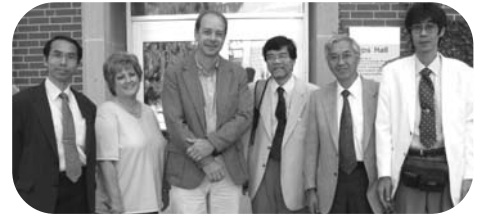
Richard Torrance 所長（右から2人目）  
（Institute for Japanese Studies）  
「科学英語コミュニケーション演習」履修の同意書を締結。写真右は、中山峰治准教授（本学客員教授）

「科学英語コミュニケーション演習（2単位）」に対して、Shizuoka Health Sciences English Program（SHEP）が用意された。この初回は、2007年12月に3週間開講され、「科学英語プレゼンテーション演習Ⅰ（1単位）」および「科学英語プレゼンテーション演習Ⅱ（1単位）」を履修した10名が参加した。

今回のオハイオ州立大学への訪問においては、(1) SHEPに対して、Richard Torrance 所長（Institute for Japanese Studies）との同意書の締

結、(2) Gary Whitby プログラム責任者 (American Language Program) とのプログラム内容の打ち合わせ、(3) SHEP実施期間中の自然科学系研究者による教育連携、および(4)将来の研究・教育連携の見通しをつけることが目的であった。

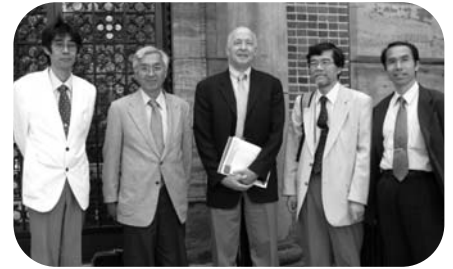
大学院学生の受け入れに関しては、Dieter Wanner 副学長代理/教授 (Office of International Affairs) およびPatrick Osmer 研究科長/教授 (Dean of Graduate School) と会談の機会を得た。自然科学系としては、College of Food, Agricultural, and Environmental Science、College of Education and Human Ecology、Medical Center、College of Pharmacy、およびCollege of Biological Sciences の学部長/研究科長等に会い、大学院連携の打ち合わせを行った。



Gary Whitby プログラム責任者 (左から3人目)、Kathy Romstead プログラム責任者代理 (左から2人目) (American Language Program) 「科学英語コミュニケーション演習」の履修を担当して頂く。



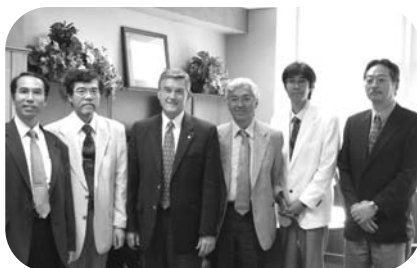
Dieter Wanner 副学長代理/教授 (写真中央) (Office of International Affairs) オハイオ州立大学における大学間連携の責任者



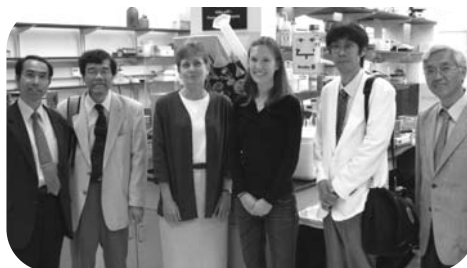
Patrick Osmer 研究科長/教授 (写真中央) (Dean of Graduate School) オハイオ州立大学の全大学院研究科を統合した責任者



この学科はアイスクリーム・コーン発祥の地



Bobby D. Moser 学部長/副学長 (左から3人目) (College of Food, Agricultural, and Environmental Sciences) 学生・教員数において、この学部だけで本学に匹敵する。



Denise Smith 学科長/教授 (左から3人目)、Robin A. Ralston, RD, LD, プログラム責任者 (右から3人目) (Department of Food Science and Technology、College of Food, Agricultural, and Environmental Sciences) 機能性食品への関心が高い。



Earl H. Harrison 教授 (写真中央)、Joshua Bomser 助教授 (後列右から2人目) (Department of Human Nutrition、College of Education and Human Ecology) Harrison教授は、カロテノイド研究の権威。



Kay N. Wolf 部門長 (左から2人目) (Medical Dietetics Division、School of Allied Medical Professions、Medical Center) 臨床栄養指導において実績が高い。



Robert W. Brueggemeier 学部長 (右から3人目)、Kenneth M. Hale 学部長補佐 (左から2人目) (College of Pharmacy) 学部の規模と研究対象が本学薬学部/研究科と類似しており、連携先として相応しい。



学部長室に保存されている100年以上前の処方箋



Joan Herbers 学部長 (左から3人目) (College of Biological Sciences)  
米国の学部長はかくあるべきというパワーを感じる。



Richard T. Sayre 教授 (左から3人目), Randy Scholl 学科長/教授 (写真左) (Department of Plant Cellular and Molecular Biology)  
Sayre 教授とは親交が厚い。Scholl 教授が所長を務める Arabidopsis Biological Resource Center (ABRC) は、モデル植物シロイヌナズナの系統保存センターとしては世界最大規模である。

## カリフォルニア大学 (University of California)

静岡県は、カリフォルニア州との間で、情報交換、人的交流の促進、交流の窓口の設定等を骨子とした合意書を1981年に締結し、以後、姉妹州となっている。カリフォルニア大学は、21万名強の学生を擁し、教職員は17万名に及び、これらは10校に分散する。その中で、Berkeley校は最も古く、1868年の創立に遡る名門である。2007年6月に本学との間に大学

間交流協定が締結され、年間5名の大学院生の交換が可能となっている。この協定の窓口ある John Lie 部長および Sharon Lyons Butler 責任者 (International and Area

Studies) に会い、本学の自然科学系大学院生の受け入れをお願いした。また、Department of Molecular and Cell Biologyの学科長である G. Steven Martin 教授および副学科長の Michael Botchan 教授を、さらに、Bob B. Buchanan 教授および Sheng Luan 教授 (Department of Plant and Microbial Biology) に会い、本グローバルCOEへの協力を依頼をした。



カリフォルニア大学 Berkeley校の南彰博士 (写真右) 奥直人の研究室の出身で現在 Berkeley校のポスドクである南彰博士が、我々の訪問の道案内を買って出た。



生命科学分野の一流学術雑誌のトップページを飾る業績



John Lie 部長 (右から3人目) (International and Area Studies), Sharon Lyons Butler 責任者 (右から2人目) (International Protocol and Exchange, International and Area Studies)  
中山慶子教授 (静岡県立大学国際関係学部) と Lie 部長のご努力により、本学との大学間連携が既に成立している。



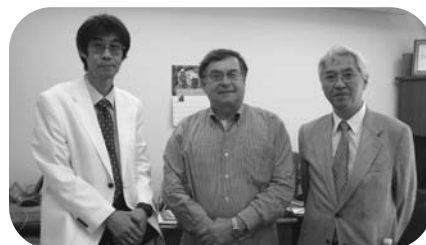
G. Steven Martin 学科長/教授 (前列左) および Michael Botchan 副学科長/教授 (前列右) (Department of Molecular and Cell Biology)  
次年度以降の具体的な連携について議論した。



Bob B. Buchanan 米国科学アカデミー会員/教授 (写真左) および Sheng Luan 教授 (写真右) (Department of Plant and Microbial Biology, College of Natural Resources)  
Buchanan 教授は、邦訳もされている世界中で最も使われている植物分子生物学の教科書の執筆者。

医学薬学分野で全米1位と評価されるSan Francisco校を訪れ、School of PharmacyのMary Anne Koda-Kimble 学部長／教授、またDepartment of Biopharmaceutical Sciences and Pharmaceutical ChemistryのFrancis C. Szoka, Jr. 教授に会い、連携の打ち合わせをした。

Davis校は、食品栄養、植物関連研究分野では世界でトップの実績を誇る。1994年に市場に出た世界最初の遺伝子組換えトマトもこの地で開発されている。College of Agriculture and Environmental SciencesおよびCollege of Biological Sciencesを訪れ、それぞれ、Neal Van Alfen 学部長／教授およびKenneth C. Burtis 学部長／教授に会い、本グローバルCOEへの協力を依頼した。



カリフォルニア大学San Francisco校のFrancis C. Szoka, Jr. 教授（写真中央）（School of Pharmacy）大学院連携の具体内容について議論した。学部長を紹介して頂いた。



カリフォルニア大学Davis校のNeal Van Alfen 学部長／教授（写真右）（College of Agricultural and Environmental Sciences）午前7:30から朝食を共にした会談であった。



Kenneth C. Burtis 学部長（写真左）およびEric Conn 名誉教授（写真右）（College of Biological Sciences）Conn教授の執筆による生化学の教科書は、邦訳版を含め、1970年代を中心に世界中を席卷した。

College of Agriculture and Environmental Sciencesでは、J. Bruce German 教授（Department of Food Sciences and Technology）および柴本崇行教授（Department of Environmental Toxicology）と研究および連携の意見交換をした。また、Genome Centerを訪れ、最新鋭のメタボローム解析機器を視察した。College of Biological Sciencesでは、コーン・スタンプ「生化学」の著者として有名なEric Conn 教授を訪問した。この場で、Paul Karl Stumpf 教授は、昨年初めに他界されたことを知った。また、John Harada 教授（Department of Plant Biology）に会い、研究と連携について相談した。



柴本崇行教授（写真左）（Department of Environmental Toxicology, College of Agricultural and Environmental Sciences）静岡県のご出身で、2007年11月19日に来学され講演された。

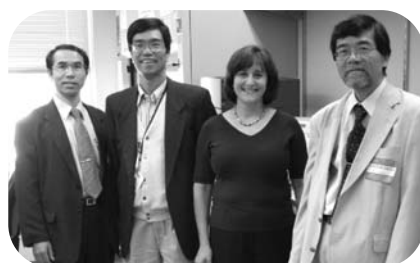
## ニュージャージー医科歯科大学 (University of Medicine and Dentistry of New Jersey)

ニュージャージー医科歯科大学は、public health分野で米国最大級の大学であり、5箇所に点在する8学部から構成される。大学院生活健康科学研究科において開講される「臨床栄養エキスパート演習（2単位）」は、Julie O'Sullivan Millet 副学部長／教授（本学客員教授）およびRiva Touger-Decker プログラム・ディレクター／教授（本学客員教授）（School of Health Related Professions）の協力で成り立つ。David Gibson 学部長（School of Health Related Professions）も含めて、連携の打ち合わせを行った。

また、Patricia Soteropoulos 所長／教授の案内で、Center for Applied Genomics（Public Health Research Institute）を視察した。危険度レベル3の実験室は圧巻であった。ニュージャージー医



David Gibson 学部長（左から2人目）、Julie O'Sullivan Millet, RD, FADA 副学部長／教授（右から2人目）、Riva Touger-Decker, RD, FADA プログラム責任者／教授（写真中央）（School of Health Related Professions）「臨床栄養エキスパート演習」でお世話になる。



科歯科大学の訪問は、Ronaldo Ferraris 教授（Department of Pharmacology and Physiology, New Jersey Medical School）に大変お世話になった。Andrew P. Thomas 学科長／教授（Department of Pharmacology and Physiology）とも研究と連携について意見交換をした。

Patricia Soteropoulos 所長／教授（右から2人目）（Center for Applied Genomics, Public Health Research Institute）およびRonaldo Ferraris 教授（左から2人目）（Department of Pharmacology and Physiology, New Jersey Medical School）Soteropoulos 所長にセンター内を案内して頂いた。

## 国際交流協定大学から短期交換留学生在が来学

本学と学術交流協定を結んでいるフランス・リール政治学院及びフィリピン大学から短期交換留学生在が来学し、10月から本学で学んでいます。

まず、フランス・リール政治学院から初めての短期交換留学生として、同学院3年生のスィブエ・マソン・フレデリックさんが平成20年7月までの予定で来学しました。フレデリックさんは、本学では、国際関係学部の稲田教授の指導を受けながら、日本語や文化・社会人類学のほか国際政治学などを勉強しています。リール政治学院では、飛び級制度による進級をしたため、18歳の若さで大学3年生に在籍しています。過去に、短期間の来日経験もあり、今回の留学で日本語能力をさらに高めるとともに、積極的に日本文化を学ぼうと意欲的に日本での学生生活を送っています。



続いて、フィリピン大学から同大学社会科学・哲学部4年生のコルヴェラ・ステファニー・エスターさんが平成20年3月までの予定で来学しました。フィリピン大学では、言語学を専攻しており、日本語をはじめとする諸言語に堪能で、各種コンテストにおいて数々の成果を収めています。特に、フィリピン大学の日本語演劇祭では最優秀賞を受賞しています。さらに、フィリピンでは、大学内外の社会活動や国際赤十字などのボランティア活動などにも積極的に参加しています。本学では、国際関係学部の小幡教授の指導を受けながら、日本語や日本文化のほかアジア事情などを勉強しています。

今回の短期交換留学を通じて、本学で多くの思い出と友人を得て帰国できるよう祈っています。

## 国際交流協定大学から教員が来学



本学と学術交流協定を結んでいるロシアのモスクワ国立国際関係大学(MGIMO)から同大学国際関係学部日本語・朝鮮語・モンゴル語・インドネシア語学科のレーズニコヴァ・タチャーナ准教授が来学され、11月2日から約1ヵ月間滞在されました。同准教授は、2002年に続き2回目の本学訪問となり、「日本における歴史研究の新傾向(方法とテーマ)」をテーマに本学教員と共同研究をされました。

## 中国・上海師範大学一行が本学を訪問

去る10月10日、静岡県中国教育旅行誘致協議会(事務局:静岡市経済局商工部観光課)の招きで来日した中国・上海師範大学の一行(教職員16名)が本学を訪れました。西垣学長はじめ関係部局長等との懇談会の中では、学生の生活環境、クラブ・サークルの活動状況、学園祭、学生カウンセリング等学生のキャンパスライフに関する本学の状況説明に対し、熱心に聞き入っていました。懇談会后、学内の施設見学を行い、校舎の構造や図書館、実験設備等について説明を受け、中国との違いを写真やビデオに収めていました。



特別会議室にて懇談会



SALLを見学

## 第5回 社会福祉・医療事業の経営研究セミナー

### 『変革の時代の医療・福祉経営を考える』を終えて

経営情報学研究科附属地域経営研究センターは、11月3日、西田在賢同センター長（経営情報学部教授）の主催により、社会福祉・医療事業の経営研究セミナー『変革の時代の医療・福祉経営を考える』を行いました。今年で5回目を数える本セミナーは、昨年、都内から本学会場に場所を移して以来、2年目を迎えました。県外からの来場者が多く、同日にイベントが多く重なり、市内の混雑が予想されたことから、同センター設立時より支援をたまわるスルガ銀行の協力を得て、本学大講堂と同行東京ミッドタウン支店をつないだ遠隔公開セミナーを試みました。東京会場には、小山秀夫教授（同学部長兼研究科長）がファシリテーターとして赴き、湯瀬裕昭副センター長（同学部准教授）と渡邊貴之先生（同学部講師）の両人によるシステム操作により、両会場を中継で結びながら、双方向の映像と音声と同時に受発信する「遠隔講義システム」を紹介し、テレビの生放送のような臨場感を実現しました。これにより、インターネット回線を使った県内外を結ぶ遠隔講義システムの実用化に向けた成功例として、同センターに実績を残すことができました。

セミナーは、厚生労働省から梅田勝先生（国立循環器病センター運営局長）、福島靖正先生（社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課長）、宇都宮啓先生（保険局医療課企画官）をお招きし、静岡本会場に135名、東京ミッドタウン会場に35名の受講者が参集し、関係者を合わせて約200名の規模となりました。そして、西垣克学長の挨拶から始まり、西田教授よりセミナーの趣旨説明とともに「制度変革の時代と医療・福祉の事業経営」



梅田 勝先生  
（国立循環器病センター運営局長）



宇都宮 啓先生  
（保険局医療課企画官）



について説明があり、梅田講師から「医療・福祉の変革について」が講じられ、続く福島講師は福祉の観点から「障害者自立支援法が目指すもの」について説明がありました。最後に、宇都宮講師は「平成20年度 診療報酬改定に向けて」の概略と動向について、実際に改定に携わられる立場として説明がありました。

いま急速に進む医療制度改革については、医療・福祉の経営従事者のみの関心に留まらず、大手チェーン薬局や薬品会社の企画・運営担当者、そして一般市民の方の参加も目立ちました。なお、セミナーの様子は地元新聞社や関連専門誌に取材されました。

（地域経営研究センター 大吉真里）

## 奨学金をありがとうございます

### 「南富士産業奨学金」授与式

南富士産業(株)奨学金授与式が12月3日に本学で行われました。

本奨学金は、南富士産業(株)により、向学心に燃える優秀な学生を援助し、国際社会、文化に貢献する人材育成の一助とすることを目的として設立され、今年度で11回目を迎えました。

「あなたは奨学金というものについてどう思うか」を論文テーマに募集し、ベトナムからの留学生で食品栄養科学部1年のグエン ファン キュー ユンさんが選ばれました。

授与式では、南富士産業の杉山定久代表取締役社長から奨学金を贈られ、グエン ファン キュー ユンさんが「奨学金をいただけるからこそ、さらに勉学を頑張る。」とお礼の言葉を述べました。



## 第12回静岡健康・長寿学術フォーラム開催される！

毎年、国内外の第一級の研究者を招請し、健康・長寿に関する高度な学術情報を静岡県から発信している「静岡健康・長寿学術フォーラム」ですが、今年は第12回を迎え、10月19、20日の2日間にわたり、静岡市のグランシップで開催されました。静岡県・静岡健康・長寿学術フォーラム組織委員会が主催し、静岡県立大学および同グローバルCOE拠点が後援いたしました。今回は昨年の静岡県立大学21世紀COEプログラム「先導的健康長寿学術研究推進拠点」に続き、浜松医科大学の同「メディカルフォトンクス」の研究成果を中心に発表が行われました。

「光を当てて、こころとからだの危険をさぐる」というテーマのもと、ワシントン大学X. ガオ博士、ハーバード大学医学部J. V. フランジオーニ博士、キングスカレッジP. マグワイア博士などの興味深い講演がなされました。静岡県立大学からは薬学部の奥直人教授と高木邦明准教授が講演しました。2日目の午後は県民フォーラムが開催され、県民の皆様にご覧いただき「こころとからだの健康長寿」に関する情報提供の場となりました。



フォーラムを通して参加者は延べ1,700人を超え、延べ400人以上の静岡県立大学生、大学院生が参加するなど、両日とも大変多くの聴講者を得て、盛会のうちに幕を閉じました。

## 研究助成採択

### 平成19年度武田科学振興財団「薬学系研究奨励（薬学）」

研究者：薬学部 教授 菅 敏幸  
研究課題：「医薬品のリード探索を指向した生理活性天然物の合成研究」

### 平成19年度財団法人持田記念医学薬学振興財団研究助成

研究者：薬学部 講師 五十里 彰  
研究課題：「リン酸化制御によるタイト結合を介した新しいイオン輸送と薬物送達システムに関する研究」

### 平成19年度財団法人持田記念医学薬学振興財団研究助成

研究者：薬学部 助教 高橋 忠伸  
研究課題：「ヒトパンデミックインフルエンザウイルスのアポトーシス増強作用を持つノイラミニダーゼ糖タンパク質を利用した抗癌研究」

### 平成19年度文部科学省「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」

研究者：国際関係学部 教授 富沢 寿勇（研究分担者）  
研究課題：「東南アジアのイスラーム：トランスナショナルな連関と地域固有の動態」

### 平成19年度静岡市産学交流センター「地域課題に係る産学共同研究委託事業」

研究者：経営情報学部 准教授 岩崎 邦彦  
研究課題：「静岡本山茶ブランド戦略策定のための調査研究」

### 平成19年度財団法人静岡総合研究機構学術教育研究推進事業費補助金

研究者：生活健康科学研究科 助教 伊藤 創平  
研究課題：「酸化修飾タンパク質のX線結晶構造解析・プロテオミクスの解析による新たな展開」

研究者：薬学部 助教 横山 英志  
研究課題：「膜タンパク質ストマチンの多量体構造とその制御機構の解明」

研究者：食品栄養科学部 助教 石井 剛志  
研究課題：「摂取効率の改善に向けた茶カテキン類の安定性に関する因子の探索」

研究者：国際関係学部 准教授 見矢野 マリ  
研究課題：「静岡地域における廃PETボトル処理行政に関する研究」

研究者：看護学部 助教 山田 貴代  
研究課題：「自費診療外国人の受診状況に関する研究」

### （静岡県SOE助成）

研究者：薬学部 教授 伊藤邦彦  
研究課題：「生活習慣病の予防や薬物治療に有用な遺伝子マーカーおよびバイオマーカーに関する研究」



## 受賞

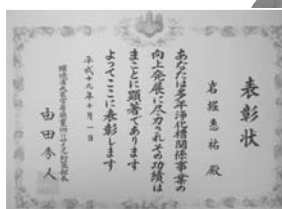
### ■『ブレイクスルーの科学』パピルス賞受賞

2007年11月20日パレスホテルで『ブレイクスルーの科学—ノーベル賞化学者・白川英樹博士の場合—』(五島綾子著・日経BP社)の著作が関科学技術振興記念財団から「学問と社会をつなぐことに貢献する著作」を顕彰するという主旨にふさわしいと評価され、伊澤達夫NTT顧問(東工大副学長)、加藤隆史東京大学大学院工学系研究科教授ら8名の審査員による審査を経て、第5回パピルス賞(自然科学部門)が本学経営情報学部五島綾子教授に授与されました。第1回山本義隆著『磁力と重力の発見, 上・中・下』(みすず書房)、第4回梅田望夫著『ウェブ進化論』(筑摩書房)について3人目の授賞です。本書はノーベル賞化学者・白川英樹博士の軌跡を通し、基礎科学者としての自我の確立がセレンディピティーと異分野融合によりブレイクスルーの科学に導き、30年を経てイノベーションに繋がりがつづつあることを綴ったものです。



### ■環境省大臣官房廃棄物・リサイクル対策部長表彰を受賞

環境科学研究所 岩堀恵祐教授(研究所長)は、第21回全国浄化槽技術研究集会(青森、10月10日、11日)で「浄化槽関係事業功労者・環境省大臣官房廃棄物・リサイクル対策部長表彰」を受賞しました。この表彰は、平成19年度に新たに制定され、多年にわたり浄化槽関係事業の向上発展に尽力した研究者に贈られるもので、岩堀教授は栄えある第一回目の受賞者に選ばれました。



岩堀恵祐教授(右側)

### ■第40回安達峰一郎記念賞を受賞

国際関係学部の児矢野マリ准教授は、国際法の優れた研究業績に対して贈られる第40回安達峰一郎記念賞を受賞しました。外交官で国際法学者の安達峰一郎(日本人初の常設国際司法裁判所長、1869~1934年)を記念する財団が、その遺業を後世に伝え、国際的人材を養成することを目的に設けたのが同賞です。同准教授の著書『国際環境法における事前協議制度—執行手段としての機能の展開—』(有信堂高文社、2006年)が評価され、受賞となりました。県内所在の大学教員としては初の受賞であり、女性の受賞者は同准教授が5人目です。10月29日に都内のホテルで授賞式が行われ、本賞の純銀製メダルと副賞の金一封が授与されました。「賞を賜る拙著は長い間さまざまな苦勞を積み重ねた末に生まれた著作なので、本当に嬉しく思っています。恩師、先輩、友人、同僚、家族など、私を支え続けてくれた多くの人々に心より感謝します。今後も自らの問題意識を大切に、チャレンジングな研究を続けていきたい」と、同准教授は述べています。



児矢野准教授の著書、受賞メダルおよび賞状

### ■第11回「国際開発研究 大来賞」を受賞

国際関係学部 湖中真哉准教授の著作『牧畜二重経済の人類学—ケニア・サンプルの民族誌的研究』(世界思想社、2006年)は、第11回「国際開発研究 大来賞」を受賞しました。同賞は、国際開発の分野で大きな足跡を残されて同財団の初代評議員会会長を務められた前外務大臣の大来佐武郎先生を記念して、財団法人 国際開発高等教育機構が、この分野における研究を奨励するため、国際開発の様々な課題に関する優れた指針を示す研究図書を顕彰するものです。平成19年11月16日に、同財団にて、表彰式・記念講演会が開催され、審査委員長の同財団川上隆朗理事長より、表彰状、楯、目録が授与されました。



湖中真哉准教授(前列右から2人目)

### ■メタロチオネイン及びメタルバイオサイエンス研究会2007研究奨励賞を受賞

平成19年9月28、29日に徳島で開催された「メタロチオネイン及びメタルバイオサイエンス研究会2007」で薬学部医薬生命化学分野客員共同研究員の玉野春南さんが研究奨励賞を受賞しました。これは、研究会で発表した若手研究者(大学院生を含む)で、優れた論文を学術雑誌に発表したものに授与されます。Behavioural Brain Researchに2007年に掲載された論文(Title: Anxiety-like behavior of young rats after 2-week zinc deprivation)が受賞対象となりました。



玉野春南さん

### ■第14回日本排尿機能学会「河邊賞」を薬学研究科大学院生が受賞

平成19年10月4~6日に開催された第14回日本排尿機能学会(ホテルリステル猪苗代)において、本学薬学研究科博士課程3年、丸山修治君(機構薬剤学講座)が「河邊賞」を受賞しました。「河邊賞」は、国際尿禁制学会(ICS: International Continence Society)において発表が受理された日本人研究者の中から、特に優秀な発表に贈られる賞です。8月20~24日にオランダのロッテルダム市で開催された2007年ICSにおいてポスター・口述発表として採択された発表演題:「In vivo analysis of brain muscarinic receptor occupancy after oral oxybutynin in conscious rhesus monkey by using positron emission tomography (PET)」が高い評価を受けたことが受賞理由です。



丸山修治君(右側)

# 図書館だより

年末年始の慌しさから静けさが戻り、図書館で本を読もうと思っているみなさんに、先生方からのお薦め本を紹介します。

## 《私の1冊の本》

広報誌「はばたき」に掲載しているシリーズ『私の1冊の本』は、先生方がこれまでに読んで感動し、心に残った本を、学生のみなさんに紹介していただくシリーズです。第1回目は野口博司教授（薬学部薬学科）『生命操作は人を幸せにするのか』と、小谷野俊夫教授（国際関係学部国際関係学科）『福翁自伝（新訂）』にお願いし、これまでに15人の先生方にお薦めの本を紹介していただきました。

紹介された図書は県立大学附属図書館の書架に配架してありますので、是非読んでみてください。すでに読んだことがある方には、あらためて読み直してみることをお薦めします。以前読んだときの思い出が呼びさまされたり、あるいはこれまで読んだ時とは違った新たな感動が皆さんの心に響くことと思います。

## 《教員が選んだ100冊の本》

図書館では、学生の皆さんに在学中に読んでいただきたい本を先生方から推薦していただき、図書館2階自由閲覧室に配架しています。専門書以外にも、司馬遼太郎の大河小説『坂の上の雲』や、深い愛情をこめて昆虫の観察記録を綴った『ファール昆虫記』、さまざまな分野で活躍した人物の自伝・評伝を集めた『人間の記録』シリーズなど、幅広いジャンルの本を読むことができます。

リストは図書館のホームページ「教員が選んだ100冊」からダウンロードできますので、100冊読破に挑戦してみてください。



推薦図書コーナー

## 《本学教員からの寄贈著書》

図書館では、先生方に著作の寄贈をお願いしています。寄贈していただいた資料は図書館2階自由閲覧室に、「教員著書」として配架してあります。「教員著書」も一般の図書と同じように借りることができますので、先生方の最新の研究成果に触れてみてください。

平成19年9月から11月までに、寄贈していただいた著作は次のとおりです。

- ・ 齊藤和巳 教授（経営情報学部経営情報学科）『ウェブサイエンス入門—インターネットの構造を解き明かす—』 齊藤和巳著 N T T出版 請求記号547.48/Sa 25
- ・ 津富 宏 准教授（国際関係学部国際関係学科）『医療専門職のための研究論文の読み方—批判的吟味がわかるポケットガイド—』 イアン・K・クロンビー著；津富宏訳 金剛出版 請求記号490.7/C 93
- ・ 大澤隆幸 教授（国際関係学部国際言語文化学科）雑誌『八雲 19号』 大澤隆幸著「リトルな妻」と「小ママサマ」、  
「隠岐の鳥かけ足滞在記」 小泉八雲顕彰会 請求記号 930.5/Y-1

このほかに、先生方が履修要項で紹介した図書や指定図書の一覧も、図書館のホームページから見ることができます。今学期も残り少なくなりました。学生生活の大切なひと時を、図書館で本と向き合って過ごしてみてください。

## シリーズ 『私の1冊の本』

シリーズ『私の1冊の本』のバックナンバーは、図書館ホームページ「私の1冊」から読むことができますので、まだ読んでいない方はこの機会に是非読んでみてください。

**木苗 直秀 食品栄養科学部食品学科 教授**

紹介図書名：『健康・老化・寿命  
一人といのちの文化誌一』  
(中公新書1898)

著者名：黒木登志夫

出版社名：中央公論新社

I S B N : 978-4-12-101898-4

図書館所蔵：閲覧室2階 学生文庫 中公/1898



我が国では少子高齢化が急速に進んでおり、昨年から総人口が減少しはじめた。このことは国際化、情報化が進む中で、我が国の将来を考えると極めて重要な社会問題を含んでいると思われる。平成18年の日本人の平均寿命は女性が85.81歳(22年連続世界1位)、男性が79.00歳(世界2位)と地球上で最長寿命国であり、病気で床に伏せている期間を差し引いた健康寿命も世界で第1位を保持しており、100歳以上の超高齢者は3万人を超えた。このことは誠に喜ばしいことである。しかし毎年100余万人が亡くなっており、特にがん、心疾患、脳血管疾病が死亡率の60%を占めている。最近、BMI (body mass index: 体重kg÷(身長m)<sup>2</sup>) や血糖値、血圧、血中脂質量からメタボリックシンドローム(代謝疾患症候群)が壮年以降のみならず、若者にもみられ、特に動脈硬化症や糖尿病など生活習慣病を発症することから、その対策は急務となっている。しかし、高齢者が増加しているため、高騰する医療費が我が国の財政を圧迫しており、病気にかかりにくくするための工夫(一次予防)が益々重要になっている。

「人はなぜ病気になるのか」。この質問に直接、間接に答える多くの書籍が出版されている。本年7月に黒木登志夫先生(東北大学医学部卒業、東京大学医科学研究所、WHO国際がん研究所に勤務、現在岐阜大学長)が、その問いに対して適切な答えとなる『健康・老化・寿命』を出版された。先日、黒木先生が来学されたので食事をしながらお話をする機会を得た。また、当学部生・院生に特別講義をして頂いた。

本書は寿命、老化、肥満、糖尿病、循環器疾患、がん、感染症、生活習慣、別れの9章から構成されている311頁、定価880円の小冊子である。

糖尿病、心臓病、がん、感染症など生命を脅かす疾患の解明が進み、治療法も急速に進歩していること、しかし、生物の寿命には限界がある。何が寿命を決めているのか、ヒトはなぜ太り、なぜ歳をとり、なぜ病気になるのか。これらの疑問について、先生御自身の研究成果とともに100余冊の文献を引用しながら丁寧に解説されている。黒木先生は御自身が大腸がんや狭心症を克服されており、患者の立場に立ってもその対応を言及されている。また、歴史と生物進化の視点から遺伝子や病原微生物などの狩人たちが人間ドラマを背景に描かれている臨場感あふれる医学物語とも言えるものである。先生はロマンチストであり、生死をめぐる文学作品や映画の名場面を取り入れ、読者の知的好奇心を駆り立てている。がんの潜伏期間は10年から30年とも言われている。現在10代から20代の学生諸君を含め、教職員の皆様には是非一度目を通して頂きたい一冊としてここに紹介したい。

**山田 浩 薬学部 教授**

紹介図書名：『華岡青洲の妻』

著者名：有吉佐和子

出版社名：新潮社

I S B N : 4-10-301117-3

図書館所蔵：閲覧室1階 913.6/A78



華岡青洲は1804年、エーテル麻酔が世に出るより40年余り先駆けて、世界で初めて全身麻酔による乳癌手術に成功した外科医です。有吉佐和子著の『華岡青洲の妻』は、その不朽の業績の陰に、麻酔薬「通仙散」を完成させるために自ら進んで人体実験に身を捧げた妻と母の、尊い美談の裏に繰りひろげられた青洲の愛を争う二人の女の確執を描いています。封建社会における「家」重視社会の中での嫁と姑の姿を浮き彫りにしながら、現代家庭にも通じるリアリティが感じられる名作です。

青洲は1760年紀州にて、医師の父・華岡直道と母・於継(おつぎ)の間に長男として生まれました。京都で3年間医学を学んだ後、帰郷して父の跡を継ぎ、診療に取り組む傍ら麻酔薬「通仙散」の開発研究に打ち込みます。診療を行ないながら、より良き治療法を開発しようという姿は、今の創薬の世界と相通じるものがあり興味深いところ。青洲の妻・加恵は、幼少時より憧れていた於継から囑望されて華岡家に嫁入りしました。青洲はその頃、京都遊学中で、花婿の座には「本草綱目」が置かれ、婿不在で新しい生活が始まりましたが、嫁と姑の仲は睦まじく幸せな毎日でした。ところが、青洲が帰郷した日から状況は一変し、一人の男を巡って嫁と姑の争いが始まることとなりました。

動物実験によって「通仙散」の効果を確認した青洲は、

次に人間で試すにはどうすべきかと考えていました。そんな青洲の気持ちを察し、於継は実験台になると言い出し、それを聞いた加恵も自分で試すようにと迫ります。どちらも引かないのを見て、青洲は二人にやってもらうと重い腰を上げました。肉親を臨床試験の被験者にする時のインフォームドコンセントが、この時適切に行なわれたのかは甚だ疑問ですが、薬の開発において人体実験は避けて通ることができない道です。結果として、青洲は母と妻に麻酔薬を飲むことになりましたが、実際には、母には「通仙散」を殆ど含まない睡眠薬を、妻には「通仙散」を服用させます。このあたりの青洲、於継、加恵の心の動きが臨場感を持って感じられ、読者を強く惹きつけてやみません。

母「於継」は麻酔薬の完成を見る事なく亡くなり、実験中に、妻「加恵」が薬の副作用で失明するという犠牲を払いながら、麻酔薬「通仙散」は完成します。そして60歳の乳がん患者に対し、青洲は世界初の全身麻酔下の乳癌摘出手術に成功することとなります。

この本を読んで更に興味深かったことは、青洲の研究のプロセスが現代の薬の開発と同じステップを踏もうとしていることです。麻酔薬を開発するために、麻酔に有効な成分をもつ薬草「曼荼羅華」を栽培し、次いで犬や猫による動物実験を幾度も繰り返し有効性と安全性を確かめ、その後、人における臨床試験を開始しています。現代の薬の開発でも、法の規制の下に、薬の候補物質の探索(基礎研究)から始まり、動物実験などの非臨床試験、次いで人における臨床試験(治験)が行なわれています。青洲が生きていた18世紀末から19世紀始め頃は、日本はもとより世界中でこのようなステップを踏んではいなかったのです。その意味で、青洲は現代の薬の開発のプロセスを踏もうとした最初の医師ともいえるでしょう。

## 食品栄養科学部1年生による学外研修旅行

食品栄養科学部 栄養生命科学科 助教 井上広子

9月26日(水)に食品栄養科学部1年生の学外研修旅行として、ヤクルト本社富士裾野工場(裾野市)と恩賜林憩いの家(富士吉田市)に行ってきました。木苗副学長、中山学部長をはじめ、食品生命科学科より熊澤准教授、増田助教が、栄養生命科学科より大島教授、桑野准教授、三好助教、井上が、また学生室より池野主査が引率しました。

午前には訪れたヤクルト本社富士裾野工場では、代田稔博士による健腸長寿の考えによって生まれたL.カゼイ・シロタ株の体内での働きや医療での活用、ヤクルトの歴史などについてのDVDを鑑賞し、その後、実際に製品を製造している工程、ラインの見学を行いました。学生たちは、驚きと感動した様子で製造現場を見て、説明をしていただいた方の話を興味深く聞き入っていました。これから食品や栄養を深く学ぶ学生たちにとって、刺激になる経験ができたと思っております。

午後は、山梨県富士吉田市に位置する恩賜林憩いの家に行き、バーベキューを行いました。バーベキューの班は、学生たちが自ら交流を深めるために、食品生命科学科と栄養生命科学科の合同の班を作り、焼肉をはじめ焼きそばなどを各班オリジナルで調理し、歓談を交えながら楽しいひとときを過ごしました。また、復路では朝霧高原にある“まかいの牧場”に立ち寄り、濃厚な味のソフトクリームなどを堪能しました。

入学後、初めての学外研修旅行でしたが、天気にも恵まれ、学生間、また教員と学生間の交流も深まり、とても充実した研修旅行になりました。今後もこのような楽しく、充実した研修旅行を企画し、学生の学ぶ場・交流の場を開催していきたいと考えております。



食品生命科学科



栄養生命科学科

～ヤクルト富士裾野工場前にて～



バーベキューの様子～恩賜林憩いの家にて～

### 教員の人事

**昇任者** (12月1日付)  
 食品栄養科学部：合田敏尚准教授 →教授へ  
 薬学 部：佐塚泰之講師 →准教授へ

**採用者** (1月1日付)  
 経営情報学部：准教授 藤澤由和  
 薬学 部：助教 南 彰

### 名誉教授称号授与 (10月1日付)

永井洋子 先生 (前看護学部・大学院看護学研究科教授)

永井洋子前教授は、平成2年4月日本自閉症協会心理療育相談員となり、その後も一貫して自閉症児の発達及びその家族の支援の研究と実践に従事し、平成8年4月福島大学教育学部非常勤講師(家族関係学)、平成9年文部省派遣として千葉県スクールカウンセラーを務めた後、平成10年静岡県立大学看護学部に生涯発達心理学、臨床心理学担当の教授として就任されました。赴任翌年の平成11年から活動を開始した“家族支援サロン”は、現在でも年5、6回ほぼ定期的に開催され、障害児を持つ家族からの信望は絶大なものがあり、その業績は、自閉症児にのみ限定されたものではなく、思春期の心の健康、不登校と心の発達など広く小児の精神発達全体にわたっております。



社会活動では、静岡県障害児(者)支援連絡協議会副会長及び同協議会地域療育部会長、静岡県子ども家庭相談センター総合支援部運営協議会会長等を歴任し、この分野での地域に対する貢献は極めて高いものがあります。

大学運営に関しては、保健衛生委員会委員長、評議員、学長補佐等を歴任後、平成17年健康支援センターが設立されると同時に初代センター長に就任し、センターの設立趣旨を具体化するための基礎的な組織作りに誠心誠意ご尽力されるとともに、学生のこころの相談や健康の維持増進、予防活動等従来型の管理を中心とした保健センターとは異なる特色を持つ健康支援センターの活動を軌道に乗せるため多大な貢献をされました。

## キャリア支援センター

本学では、平成19年度に「キャリア支援センター」を設立しました。

キャリア支援センターは、「働き方」を含めた「生き方」全体をその人の「キャリア」ととらえ、学生がさまざまなリスクに対処しながら自らの「キャリア」を主体的、自律的に選択・決定していくために必要な能力を身につける手助けをしたいと考えています。

また、センターは、学生に他者への信頼に基づいた、開かれた人間関係を築けるようになってもらいたいと考えています。充実したキャリアの形成には、他者との助け合いが欠かせないと考えるからです。

そして、センターは、学生が在学中も卒業後も一人の市民として積極的に社会に参画していけるようになることを目指しています。

センターは、こうした理念に基づきながら、学生が希望する道に進めるよう、各学部・研究科の教員と連携を図って、キャリア形成支援・就職活動支援に取り組んでいきます。



キャリア支援センター

### ■センターが実施している支援事業

#### 〈キャリア形成支援〉

- キャリア形成に関わる講演会、シンポジウム、セミナー等の開催。
- 各種インターンシップへの参加の推進。
- 学生の自主的な取組みとの連携・支援。

キャリア支援サークル『学生ネットワークDREAM SEEDS』などの学生の自主的な取組を支援しています。

#### 〈就職活動支援〉

- 就職情報の提供  
企業から寄せられる求人情報や業界情報および就職関連の各種資料の提供。卒業生の就職活動の記録も閲覧できます。
- 就職ガイダンス  
就職活動の仕方から具体的な試験対策講座まで、幅広い種類のガイダンスの開催。
- 個別相談  
民間企業の経験者、理系の研究・技術職経験者をキャリア・アドバイザーとして配置し、個別の相談に対応。



面接対策講座

## 食品栄養科学部・生活健康科学研究科インターンシップ反省会

大学院生活健康科学研究科 教授 酒井 坦

今年で7年目を迎えた食品栄養科学部・生活健康科学研究科インターンシップの反省会が10月5日(金)に行われました。夏休みの間に1週間(実質5日)または2週間(実質10日)、社会人と同じように定時に入社し実際の仕事を体験した学生諸君と、その間親切に指導して頂いた受入先の担当者の方と、インターンシップをアレンジした教員・事務職員が同席しました。

参加者全員に発言していただき、受入先からは学生がまじめで良くやってくれた、学生に仕事を教えてみて受入側の不十分どころが分かった、有意義であり来年も行いたいなどの意見がよせられました。学生からは手際が悪いのに親切に教えて頂いた、ともかく楽しかった、自分の将来を決めるのに役に立つと思うなどの意見がありました。教員が事前に受入先と打ち合わせることは高い評価をうけましたが、学生の専門や興味が事前に分かれば、よりきめ細かい対応ができるとの意見も頂きました。

今年度は受入先が二つ増え13企業1財団法人5研究機関で大学院生20名、学部の3年生12名の計32名が7月30日から9月14日までの間に研修を受けましたが、希望していながら日程や場所の関係であきらめた学生もおりました。今回指摘された点を参考に、今後も受入先を増やして行きたいと思っています。



インターンシップ反省会

## 「清水ロータリークラブ国際交流活動助成金」授与式

清水ロータリークラブ国際交流活動助成金の授与式が9月25日、静岡市清水区のホテルサンルート清水で行われました。

本助成金は、清水ロータリークラブにより、本学の外国人留学生を支援するために本年度新たに設立されたもので、今回は本学のIFC（International Friendship Club）が実施する留学生と日本人学生の交流活動事業が選ばれました。授与式では、IFC副部長で国際関係学部2年の清水 萌さんがお礼の言葉を述べると共にIFCの活動報告を行ないました。



## 「清水ロータリークラブ静岡県立大学留学生日本語学習奨励金」について

11月6日、静岡市清水区のホテルサンルート清水で開催された清水ロータリークラブの月例会において、留学生日本語学習奨励金の支給対象者の紹介が行なわれました。

本奨励金は、清水ロータリークラブにより、本学の外国人留学生の日本語学習を支援するために本年度新たに設立されたもので、本年度は、学部1年生のうち現在奨学金を受給していない者9名が支給対象者として選ばれました。これらの対象者は、来年の3月以降に開催される清水ロータリークラブの月例会において日本語によるスピーチを行い、奨励金を支給される予定です。



## テコンドー世界大会に出場して

大学院生活健康科学研究科 博士後期課程二年 稲守房子

私は、8月にイギリスで開催された14回シニアITF世界テコンドー選手権大会に参加してきました。

個人と団体の5種目で代表に選出されて浮かれていた私は、すぐに「国を背負うのは大変な事だ」と思い知りました。代表選手は全員、毎週末の合宿で限界まで自分を追い詰め、私も足を引き摺りながら登校する日々が続きました。

そんな長く苦しい準備期間を経て8月1日、大会は開幕しました。何十カ国もの選手と観客が集まる世界大会は、独特の雰囲気にも包まれています。私は、壮行会で頂いた大学ワッペンに触れてプレッシャーに耐えつつ、個人戦はベスト16まで、団体戦では組手（マツギ）・型（トゥル）共に決勝まで駒を進めていきました。

決勝戦は、最終日の最終種目として行われます。極度の集中から会場が静まり返っている様を感じる中、日本キャプテンの腕が主審に高々と上げられた瞬間。歓喜が全身を支配し、気付けば全員で抱き合っ、人目を憚らず号泣していました。最終的な結果は、女子団体・型で金メダル、同じく団体・組手で銀メダル。更に最優秀女子チームに日本が選ばれ、大きな銀杯も授与されました。

今回、この様な経験をさせて頂くにあたり、本学の皆様にも、沢山のご声援やご支援を頂きました。私の手元にある金と銀のメダルは、皆様のお力添えあってのものと思います。最後になりましたが、この場を借りて、厚く御礼申し上げます。



日の丸を持ち喜び合う選手たち  
（左端が稲守さん）

## はばたき寄金からのお知らせ

### ●第11回学生文芸コンクール入賞作品決定

今年度の学生文芸コンクールは、文芸部門（短編小説、紀行文、詩・その他、短歌、俳句）及び評論・エッセイ部門で作品募集をしたところ、文芸部門で20人から25作品（短編小説7・紀行文4・詩11・俳句2・その他1）、評論・エッセイ部門では、3作品の応募がありました。

本学の先生方による審査が行われ、次のとおり入賞作品が決定しました。

表彰式は、剣祭初日の11月10日(土)に行われ、西垣学長から賞状と副賞が贈られました。



優秀賞の表彰を受ける  
生活健康科学研究科修士1年  
天野 豪春さん

#### [入賞一覧]

部門	賞区分	作品題名	氏名	所属
文芸部門	優秀賞	短編小説 迎エニ来タヨ	天野 豪春	生活健康科学研究科修士1年
		詩 鈍感	望月 和	国際関係学部4年
		詩 王権神授説	藤田美奈子	国際関係学部3年
	佳作	短編小説 ファーストラブ	近藤 雅紘	薬学部3年
		短編小説 てのひらに蝉、ポケットに懐炉	大石 涼子	国際関係学部4年
		その他 ユマコ	大石 涼子	国際関係学部4年
	努力賞	短編小説 河童の質流れ	水野 大輔	経営情報学部3年
		紀行文 吉田の歩き方～St.Louis編～	吉田 卓矢	生活健康科学研究科修士2年
		紀行文 お金がなくなったIN ベトナム	成岡 和矢	国際関係学部2年
		詩 有為、星	田副 秀章	生活健康科学研究科博士後期課程2年
		詩 大人というもの	陰山 亜矢	生活健康科学研究科修士1年
		詩 やさしいわたし	大石 涼子	国際関係学部4年

部門	賞区分	作品題名	氏名	所属
評論・エッセイ部門	佳作	エッセイ 中国の車窓から	寺田 将人	国際関係学部3年
	努力賞	評論 のりしろ	下川 良彦	薬学部4年

### ●世界テコンドー選手権大会で活躍！ 稲守朋子さんに「はばたき賞」を授与



はばたき賞の表彰を受ける  
生活健康科学研究科博士後期課程2年  
稲守 朋子さん

大学院生活健康科学研究科博士後期課程2年の稲守朋子さんが、去る8月、イギリス・バーミンガムで開催された第14回シニアITF世界テコンドー選手権大会に日本女子チームの一員として参加し、団体女子トウルで金メダル、団体女子マッソギで銀メダルを獲得するとともに、チームとしても最優秀チーム賞を受賞しました。これらの栄誉と他の学生の模範となり、本学の名声を高めたことを称え、はばたき賞が授与されました。

表彰式は、学生文芸コンクールと同様、剣祭初日の11月10日(土)に行われ、西垣学長から賞状と副賞が贈られました。

### ●モスクワ国立国際関係大学への短期交換留学生へ奨学支援金を授与

本学の国際交流協定校であるモスクワ国立国際関係大学への今年度の短期交換留学生として派遣されることになった国際関係学部3年の小嶋美穂さんに、剣祭初日の11月10日(土)に学生文芸コンクール等の表彰とあわせて奨学支援金が授与されました。小嶋さんは、12月から来年3月まで同大学でロシア語などを勉強する予定です。



奨学支援金を受ける  
国際関係学部3年 小嶋 美穂さん



学生文芸コンクール・はばたき賞表彰式及び  
奨学支援金授与式にて

## ■ 本学教員の著書紹介

### 「ストレスとGABA」

静新新書018 静岡新聞社 全137頁 2007年11月20日刊行 定価819円  
食品栄養科学部 教授 横越英彦 (著)

ストレス社会、高齢化社会と言われてから久しい。ストレスも加齢もどちらも人間が生きていく上で必然的に生じることで不思議なことではない。生きていくためのあらゆる事象には、ストレスがつきまとう。現在では、社会構造が複雑化し、また、スピード化し、ぼーっとしていると置いていかれてしまう。このことは、あらゆる年齢層に覆い被さっている。しかし、ストレスは全て否定するものではない。ストレスの引き金になる刺激には私たちの体を健全にすることもある。例えば、ジョギングや運動は、多少つらくストレスと言えが、それが心肺機能を丈夫にするなどメリットがある。試験や勉強も頭のストレスかもしれないが、それが健全な脳機能の構築や維持にとって必要である。すなわち、適度なストレスは必要であるかもしれない。

しかし、そのストレスに対して体がうまく反応できなくなった時、生活の質(QOL=Quality of Life)が低下し、さらに、ストレス性の疾患が誘導される。QOLを高めるためには、障害が出てから病院に行き、薬を飲むのではなく、日頃の食生活に注意をし、ストレスをためないようにすることが重要である。本書では、私が関わってきたγ-アミノ酪酸(GABA)成分について取り上げた。GABAは脳内神経伝達物質の一つであり、特に、興奮を鎮める抑制性神経伝達物質として知られている。また、GABAは、動物実験やヒトボランティア試験においてストレス軽減効果のあることが分かった。

これは、日常の食生活の中で一般に摂取される成分であり、その有効性がさらに明らかになれば、QOLの向上にも大いに貢献できると思われる。

本書により、読者のQOLの向上に少しでもお役に立つことができれば、幸いである。



### 「医療専門職のための研究論文の読み方ー批判的吟味がわかるポケットガイド」

金剛出版 全144頁 2007年9月25日刊行 定価2,310円  
国際関係学部 准教授 津富 宏 (翻訳) イアン・K・クロンビー (著)

本書は、医療関係者が、研究論文を科学的かつ合理的に読みこなすために書かれたコンパクトな手引きである。医療がエビデンスに基づく方向へと進むなか、教育・労働・福祉・刑事政策などの、社会政策もまた、エビデンスに基づく実務へと向かっていく。

このように、さまざまな分野の実務家には、実証研究からエビデンスを読み取ることが要求されるが、刊行される論文の数は多く、一つ一つを細かく検討する時間はない。また、文献には、統計的手法が用いられているが、必ずしも適切に用いられているとは限らない。

そこで必要になるのが、〈批判的吟味〉と言われる文献の「読み方」である。本書はこの読み方が簡潔にわかる格好の1冊であり、「サーベイ」「コホート研究」「臨床試験」「ケース・コントロール研究」など研究デザインごとに、いかに研究結果を解釈したらよいのかが示されている。批判的吟味のためのチェックリストもついており、専門的な統計学の教育を受けていなくても、正しく論文を読むことが可能になる。

医師、看護師、薬剤師、保健師、心理士、作業療法士、理学療法士などの医療専門職のみならず、エビデンスに基づく実務を志向するすべての実務家にとって役立つことを期待している。



### 「晩年長寿の達人たちー生涯現役の秘訣」

新人物往来社 全232頁 2007年10月12日刊行 定価1,600円  
国際関係学部 教授 前坂俊之 (著)

日本人の平均寿命は女性85.5歳、男性79.5歳。人口の約4人に1人が65歳以上、百歳以上の『セントナリアン』(百寿者)も約3万2000人にのぼるといふ世界一の“超高齢社会”である。

では日本人の最長寿者は一体誰なのか。トップはギネスにのった120歳の泉重千代翁だが、人物辞典を片っぱしから調べて、明治以降で、健康長寿生涯現役で活躍した日本人の年齢順ランキング500人をリストアップした。

このうち、90歳を超えてもなお生涯現役で元気に最期まで活躍した人たち、100歳超えてライフワーク、創作活動に最期の最後まで励んでいた芸術家、50歳すぎから起業して世界的な大企業に発展させた実業家、百歳まで世界の山に上った冒険スキーヤー、政治家ら晩年長寿の達人、偉人たちのベスト80人をセレクトし、その精神力、創造力、元気の秘密、食生活、健康法、長寿法などを克明に調査したのが本書である。蟹江ぎん(108歳)、平櫛田中(107歳)、大西良慶(107歳)、三浦敬三(101歳)らいるわいるわ。これら『セントナリアン』たちこそ日本人の偉大な財産なのだから、その知恵と長寿法から大いに学びたい。

本大学のグローバルCOEプログラムの「健康長寿科学」の研究にも大いに資する1冊である。



### ● ● ● ● ● ● ● 学内ニュース「はばたき」への寄稿を大歓迎! ● ● ● ● ● ● ●

教職員・大学院生の皆様の受賞、研究助成への採択、学会・研究集会の案内、クラブ・サークル活動報告、ボランティア活動などの寄稿をお待ちしています。大歓迎します。

教育研究推進部・広報室(管理棟3階)あてにお願いします。E-mail:koho@u-shizuoka-ken.ac.jp

企画・編集：静岡県立大学広報委員会(事務局 TEL 054-264-5130)

静岡県立大学ホームページアドレス：<http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp>